第三種郵便物認可　　新いばらき

時代を語る　インタビュー

みどり・いのち・そして夢

県政に若さと新風を

町議の経験と実績を今こそ発揮

都市化に対応、守谷・取手の発展へ

自然の潤い残した常磐新線開発を

守谷町議会議員

小川　一成（いっせい）氏

聞き手・新いばらきタイムス社長・武弓　操

二十一世紀に向けて守谷町は、常磐新線開通をにらみ、大きな変ぼうを遂げようとしている。本県の玄関口として、県南地区の中でも守谷町、取手市は大きな岐路に立っている。守谷町議会議員として「潤いのある街づくり」を目指してきた小川一成氏は、常磐新線関連整備はもとより、今秋オープンする「常総ふれあいスポーツセンター」開設にも積極的に取り組み、町議としての実績を次々と築き上げている。そうした実績と行動力を今度は県政の場で発揮することになった。冒険家を夢見たこともあるというロマンあふれる清廉な小川氏に、情熱の一端を聞いてみた。

日常

武弓　初めてお会いしますが、小川さんはスリムでクリーンな感じ、またはつらつとしておられますね。三人のお子様がおられますが、日常的にどのように接していますか。

小川　今春、高校を卒業した三番目の息子が、卒業にあたってパン屋さんになりたいと言った時、時間がないのにかまけて相談に乗ってやれなかった。将来の職業を決定するにあたって、本人に重い判断をさせてしまったのではないかと、今になって思っています。何が何でも進学というわけではないのですが、将来を自分で決断するにあたって、本人もかなり模索したと思いますが、もっと相談にのってやりたかったですね。それが結果的には本人の自立を促したいという面はあったのかもしれませんが……。

人生観

武弓　守谷町にお生まれになって、水海道一高から明治学院大学に進まれ、学生時代に一年間、ヨーロッパや中近東を一人旅されましたが、これはどういうお考えからお決めになったのですか。

小川　大学二年に進級する時に一年間休学して外国に出ました。当時、海外に出るにあたって、ドルの持ち出しが制限されており、五百ドル以上持ち出しができない時代でした。中学生の時に英語を勉強した時、外国に非常に興味を持ちました。また小さいころ、アムンゼンやスコットが南極点一番乗りを競う本などを読んで冒険家になりたいという夢を持っていました。冒険、探検というものに夢おどらせていた少年時代が、海外を放浪する下地にあったのだと思います。皮切りは横浜からソ連のナホトカへ行き、ハバロフスクからモスクワ、そしてフィンランド、北欧を一周してヨーロッパ大陸へ。さらにアフリカから東欧を経て中近東へと旅を続けました。トルコのイスタンブールまではすべてヒッチハイクで旅しました。いろんな人に会い、未知なる土地を見たいという欲望が強かったのですね。二十歳の誕生日はコペンハーゲンで迎えました。

武弓　この一年間の旅が、ご自身の人生観やお仕事をされている上で、大きな影響を与えていますか。

小川　この旅を契機にして、私の人生観、性格も百八十度変わったと思います。自分を素直に表現し、物事も真っすぐに見られ、世界をみる眼も広がりました。小さなバックひとつでいろいろな人に世話になりながら旅してきたことは、私のバックボーンでもあるし、どんな困難にも立ち向かえる気がするのです。

武弓　そうした経験を踏まえて、その後の人生の中で大事にされている考え方は、どういうものがありますか。

小川　この体験を通して世界を身近に感じました。肌の色、眼の色、髪の色で差別することなく、公平な眼で外国人を見られるようになりました。最近、外国人労働者が日本にたくさん来ていますが、昔、私が彼らと同じ立場だったので、彼らの気持ちがよく分かります。

武弓　その後の活動をみましても、ボーイスカウト守谷第一団副委員長や守谷町青少年海外派遣団長として渡米されたり、スポーツ少年団サッカー部会顧問をされたり、若い時の経験が生かされてますね。

小川　第一回の守谷町青少年海外派遣を計画された時に、子供たちに機会を与えてあげたい、またお手伝いしたいと思いました。語学がたんのうなわけではありませんが、私の経験を生かせればと思い、少なからずお役に立たせていただいたと思います。

政治の世界

武弓　町会議員として二期目になりますが、政治の世界に入られた動機はどういうことからですか。

小川　青年会議所の活動を七年間行ってまいりましたが、青年会議所の究極の目標は明るい豊かなまちづくりです。これを目指すには政治の世界に踏み込まなければ実現できないことが多いと思います。また、勉強してきたことが即、政治に反映できると考えたからです。

武弓　うかがいますと、小川さんは紳士的で、弁も立つし、是は是、否は否という政治信条を貫いておられ、信望が厚いといわれていますが、政治の世界に入ってみて、入る前との違いで感じた点がありますか。

小川　議員というのは住民の側に立って、住民の願いを行政に直接反映させる立場にあるわけです。それだけに自分の言葉ひとつひとつの重みを感じます。生意気のようですが、皆さんが望んでいることをどう実現させるか、政治とは理想に向かって一歩一歩現実を変えていく必死の努力が政治であって、議員六年間において、住民の考えている方向に少しは近づけていけたのではないかと思っています。

議員活動

武弓　議員活動の中でいろいろ手がけられたと思いますが、しいて力を入れたことは……。

小川　六年間の私の選挙公約に、総合体育館と温水プール建設の早期実現がありました。常総広域ごみ処理場の所に建てる計画でしたがなかなか進まず、ラチがあかなかったのですが、本会議の中で各市町村の負担金などの金額を具体的に提示しながら活動した結果、やっと今年完成することになりました。また取手、守谷は立地条件がよいため開発が急激に進められてきました。結果、失う緑も多かった。緑の保護のために、緑化基金条例の制定を提言してきたところ、昨年実現できたことですね。

また、これからの国際化社会に向けて地域からの国際化を進めるため、守谷町国際交流協会を設立し、五百人を超す会員がそれぞれの立場で参加し、活動する場を提供できたことです。毎年行われる青少年海外派遣のお手伝いや、姉妹都市との交流も会員の皆様の活躍の場でもあります。

県議選

武弓　今年暮れの県議選に、町議会有志の〝ふれあい会〟から推薦を受けて出馬を決意されましたが、これも先ほどのご自身の夢を政治の世界を流したいと思っています。

地域住民の声がすぐ届く政治を

追いかけ、住民の声を実現していきたいという考えの延長からですか。決断について悩まれたと思いますが。

小川　県南、特に取手、守谷は常磐新線が導入されますと、ここ四、五年が方向を定める重要な時期と考えます。町も県もボタンのかけ違いのないように、今度は県政を舞台に町、住民の立場で汗これをクリアし、上手に新線を導入することは町も考えていることですが、町独自では進めることはできないため、県や国としっかりとパイプを持ち、町の意向を県に反映し、住民の望む方向で新線を導入しなければなりません。

常磐新線

武弓　常磐新線の問題は、今後さらに具体化し、街づくりの骨格になっていくわけですが、ここはこうすべきだとか、小川さんなりの特別なお考えはいかがですか。

小川　百年に一度あるかないかの大きな事業になります。四万四千人の住民が待ち望んでいた大プロジェクトでありますが、騒音、電波障害、景観上、あるいは町が分断される問題など課題も山積しています。しかし、

〝緑〟

武弓　ご名刺を見ますと、みどり、いのち、そして夢とありますが、開発と緑は切っても切れない関係ですが、小川さんの緑に対する考え方はいかがですか。

小川　守谷、取手は緑の豊富なところでしたが、昭和四十年代に入って住都公団などがしっかりとした街づくりをしてきましたが、失った緑も多かったわけですね。現在ある緑をどう残せるかが命題になってきます。緑は文化遺産です。大きな木があれば、それは町の顔でもあるわけです。開発するにしても、公園などを造って新たな緑を造成するのではなく、今ある緑を取り込んだ町づくりをする必要があると思いますね。

ふるさと

武弓　守谷、取手は首都圏に通う〝茨城都民〟の方たちが多いですが、ここを第二のふるさととして親しんでもらうためにはどのような施策を行っていけばいいでしょうか。

小川　みなさん故郷は持っていますが、ここで生まれた子供たちにとっては、まさしくふるさとなんですね。ですから、子供たちが親しめる町づくり、誇れる町づくりをしていくのが大人の責任だと思います。

県政

武弓　今後は選挙という関門を突破して、茨城県全体をみることになりますが、どのように見ていますか、またどう変えていきたいと思っていますか。

小川　県南と県北はそれぞれ状況が異なっています。県北には山河があり、自然がたくさん残っている。県南は東京で働いている人が多い。休日には県北の自然を満喫し、鋭気を養い、県北の人はそういう場を提供し、相互に補完し合いながら、お互いのレベルアップが図れればいいなと思いますね。

武弓　青年会議所時代の先輩、後輩がたくさんおられるから、茨城県全体のことでもやりやすい面があるのではないですか。

小川　話が早いですね。全国にも仲間がいますから……。日本青年会議所時代は褒章委員会に所属していた関係上、素晴らしい事業活動をしている先進地を視察する機会に恵まれました。勉強になりました。一つの財産でもあります。

要望

武弓　選挙というトンネルをくぐって県政にたずさわるわけですが、県に働きかけたい地元の要望はどのようなものがありますか。

小川　住民の皆さんが身近な問題として願っていることに、柏市に通じる大利根橋の無料化があります。取手、守谷、藤代、利根の正副議長委員長会議でも県に要望していますが、なんとか早く無料化を目指したいと思います。また、関東鉄道の乙子（おとご）の踏切の立体化についても強く県に働きかけ、早期実現できるよう努力をしたいと思っています。

武弓　尊敬する政治家は。

小川　私が高校生のころの多感な時期に大きな影響を与えたケネディです。

武弓　最後に趣味はいかがですか。

小川　山歩き、スポーツ、読書です。守谷町の中学生の富士登山には最初から参加し、お手伝いしています。

武弓　本日はどうもありがとうございました。

常総ふれあいスポーツセンター　建設に多大な尽力

〝いのち〟

武弓　〝いのち〟とは福祉、高齢化問題だと思いますが、福祉施策についてはいかがですか。

小川　どう豊かな老後を送れるのか、政治がキチンと手を差しのべなければなりません。大学時代、福祉先進国の北欧に行きましたが、何が人間にとって豊かで幸せなのか、今だに疑問に思っていることがあります。年をとっても国が老後まで保障されているせいか、老人たちに覇気がないように感じたのです。半面、年をとっても働ける幸せというのもあるのではないかと感じました。しかし、ハンディキャップのある人、また働けなくなって年を重ねなければならなくなった人たちには、十分な手を差しのべるのが行政の役割だと思います。

〝夢〟

武弓　〝夢〟の中には子供の成長、教育の問題が含まれると思いますが……。

小川　県南地域は人口急増で、毎年学校が新設されています。特に取手、守谷は新しい先生の着任が多いところです。先生方の奥の深さ、幅の広さが子供たちに大きく影響すると思うのです。挫折を知らない先生も多いと思いますが、子供がつまずいた時、痛みの分かる先生であってほしいと思いますね。

農業

武弓　急激に人口が増える中で、産業としての農業という点で、今後考えていかなければならないことは何でしょうか。

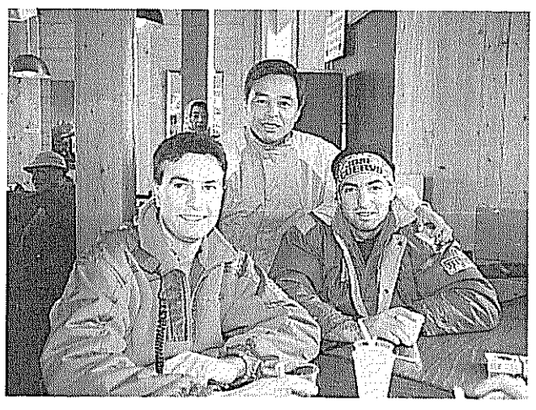
小川　守谷町は首都圏への供給地域として、野菜の生産には力を入れています。また酪農に従事している人もあり、搾乳の量も多い。ただ、河川区域にあるので、洪水の時に水害の心配があります。安全な場所に移っていただけるように建設省との話し合いもありましたが、なかなか解決できないでいます。将来に展望が持てるようにしていかなければと思っています。

県南地区活性化に〝若い力〟を発揮する小川氏（右）と武弓新いばらき社長（左）

冒険家夢みたロマンあふれる行動派

写真で見る小川さんの横顔

守谷町サッカー少年団とともに



フランスはシャモニーで現地の山岳パトロール隊員と

趣味の山歩きでリフレッシュ（尾瀬小屋にて）

母校で在校生と語らう